鬼子母神研究に関する一考察

――傍観者から当事者へ――

中井本蓉

はじめに

中井本蓉

昭和六十二年、栃木県正法寺住職の娘として生まれる。三人姉妹の長女。県内の大学を卒業後、立正大学仏教学部に三年次編入学する。卒業論文は『日蓮遺文における女人成仏について―女性宛のお手紙を中心に―』。卒業後、修士課程に進学。一年目の秋、度牒を受け日蓮宗沙弥となる。平成二十四年、『法華経提婆達多品の研究―「龍女成仏」を中心として―』と題して修士論文を提出し、修士課程修了。その後は自坊にて住職の法務を手伝う。平成二十七年二月に結婚。同年六月に第二期信行道場を修了し教師となる。

右に自己紹介をさせていただいたのは、筆者の今までの研究対象の変遷を知ることが、本稿の理解の一助になると考えた為である。立正大学編入当初、筆者は将来檀信徒に法話をする際の助けになると思い、日蓮聖人が女性に宛てられた手紙を卒業論文の題材とした。しかし研究を進めていく中で、日蓮聖人が女人成仏の依拠とされている法華経提婆達多品の龍女成仏、特に「変成男子」に関して議論の多いことを知り、これを研究テーマとして修士課程に進ん

で学ぶことを決めた。龍女成仏は、仏教思想として扱うことはもちろんのこと、民俗学的、社会学的アプローチもできる非常に魅力的な研究テーマであり、大学院で学んだ二年間で研究の面白さを知ることができた。しかし同時に学問の世界の厳しさも知り、やっとの思いで修士論文を提出した後は、博士課程には進まず、自坊に戻って信行道場入場に向けて準備を始めた。この頃から自坊の檀信徒の方々と話す機会が増えていった。その中でふと気になったのは、あれだけ必死に研究した龍女の成仏に対して、私はただ「女性の成仏を保証してくれるありがたい教え」とか、「女性を差別しない、当時としては画期的な教え」としか語れないことであった。そして聞いている檀信徒の反応も、さほど大きくなく、しかもこれだけの説明で特に不満もなさそうなのである。ありがたいと言いながら、女性の成仏の可否について両者とも大した問題意識がないことに気付かされた。特に自分自身に落胆し、ある疑念が生じた。「私は知的好奇心だけで龍女成仏を研究したに過ぎなかったのではないか」と。

そんな折、地域の商店を歩いて巡る観光ツアーの一行の来訪があった。聞いてみると、自坊の裏手にある料理店へ向かう途中の時間調整で訪れたらしく、差し支えなければ本堂の中を見学させてほしいとのことだった。

鳥肌が立つほどの当事者意識

観光ツアーの参加者は、全員が中高年の女性だった。人数は四、五人だっただろうか。少し緊張した様子であったが、私のつたない案内を頷きながら熱心に聞いてくれた。本尊壇と位牌堂の説明が終わり、脇陣の鬼形鬼子母神像の前に移動した。名前を聞いてもピンときていないようだったので、「恐れ入谷の鬼子母神で有名な……」と言うと皆さん「ああ！」と合点がいった様子だった。折角の機会なのでどういう神様か少し説明した方が良いかと思い、次のような簡単な話をさせていただいた。

昔々、鬼子母神が人の子をさらって食うので、人々が釈尊に助けを請うたところ、釈尊は五百人とも千人ともいわれる鬼子母神の子のうち、一番下の子を隠した。一番かわいがっていた末子がいないことに気付いた鬼子母神は髪を振り乱して我が子を捜し求め、ついに釈尊のもとへたどり着きなんとかして子どもに会わせてほしいと懇願した。すると釈尊は「五百人（あるいは千人）いる子どものうちの一人を失っただけでもお前はこんなに苦しんでいる。一人か二人しかいない子どもを失った親の嘆きはいかばかりであろうか」と諭された。これを聞いた鬼子母神は自分がいかに惨い行いをしてきたかをさとり、もう二度と人の子を食わず、これよりは釈尊に帰依し、小さい子どもの守護神となることを誓った。

説明している最中、それまでにこやかだったご婦人達の顔色がみるみる変わっていくのがわかった。話している私まで何か不安になってくるほどである。説明が終わったとき、一人は涙ぐみ、また一人は二の腕をさすりながら、「なんだか鳥肌が立っちゃった」と言っていた。もう片方の脇陣の説明もしたかったがとてもそんな雰囲気ではなくなってしまったので断念し、ツアーの案内人にお客さんを返した。しどろもどろの拙い話を聞いただけでこんなに人の心を動かす鬼子母神さまとは、どういう神様なのだろう……、と、この日以来考えるようになった。

あくる日、檀家の女性とお茶を飲んでいるときに、ふと思い出して観光ツアーのお客さんのことを話した。すると彼女は、「その人達の気持ちわかる！」という。「だって、自分もそうなるかもしれないと思うから」と。その奥さんは二人の子を持つ母親だからこそ感じるものもあるのかもしれない。とにかく私は、鬼子母神のエピソードに対して女性がこれほどまでに「当事者」として話を聞いてしまうことに驚いた。そしてしばらくして、自分が龍女成仏、ひいては女人成仏に対してとっていたのは、「傍観者」という立場だったのだと思い至った。

苦海の底で

修士論文のテーマにまでした龍女成仏に対してさえ、傍観者、すなわち他人事と捉えていた。そもそも、提婆達多品に登場する龍女は非常に優れた人格を備えており、いくら龍王の娘で畜生の身だからとはいえ成仏しても不思議ではない、それほどの人物と自分とは同じ女性として括るにはあまりにレベルが違いすぎるという思いもあった。しかし、信行道場に向けて読経や法式声明の練習、僧道林、入場考査と、慌ただしく毎日が過ぎていく中で、傍観者という自分の心の在りようについて考えることもなくなっていった。また信行道場入場のわずか三ヶ月前に結婚式を挙げたため、その準備や挙式後の新しい生活の整備に追われてもいた。あっという間に信行道場が始まってしまい、辛く苦しい三十五日間も、終わってしまうとやはりあっという間だった。このタイミングで信行道場に行けたことは、自分の人生にとって本当に幸運だったと今は感じている。本当の苦しみは、信行道場を出たあとに訪れた。

道場を出たという開放感にしばらく浸っていたが、すぐにそうもいかなくなった。自分の両親と夫の間でどう立ち振舞えば良いのか、翌年道場に入る予定の夫に対して僧侶の先輩として何がしてあげられるのか、やることすべて裏目に出ているような気がして、どんどん心が荒んでいくのを感じた。なによりショックだったのは、どんなに檀信徒の方が喜んでくれても、どうしても剃髪には二度としたくない、という自分の強い気持ちだった。開き直って堂々と髪を伸ばしているふりをしつつ、そんな自分を情けないと思い、日々長くなる髪に喜びを感じながらも、その様子を冷ややかな目で見るもう一人の私がいた。周囲の人は温かく見守ってくれているのに、毎日苦しい、苦しいと思っていた。そんな日々の中で心の支えになっていたのは、自坊の鬼子母神さまのお姿だった。

ある先生に教えられたことがある。鬼子母神さまのお像には、岩の上に立って合掌しておられるものがある。これは、み仏の教えに導かれて自ら修行し、苦海から這い上がってこられたお姿であると。私は自坊でこの言葉を思い出

し、本堂の鬼子母神さまのもとに行った。青黒い岩の上に、たしかに鬼子母神さまはしっかりと立ち、合掌して私の目をじっと見返しておられた。その金色の、子どもの頃は怖くて直視できなかった目を見つめて、私もこんなふうになれる、自分の苦しみの種をきっと見つけられると自分に言い聞かせていた。そしてある日、思いも寄らないタイミングでその瞬間は訪れた。

傍観者から当事者へ

そのとき私は、初めて参加する教化学研究発表大会で何をしたらいいのかわからず、悩んでいた。その立ち姿がなによりも自分の心の支えとなっている鬼子母神さまの研究をすると決めたはいいものの、せっかく取り寄せた本を読んでもさっぱり頭に入らない。こんなことなら、修士論文同様、法華経の提婆達多品を取り上げれば、資料もたくさんあるし、少しはましだったかもしれないとさえ思った。一体どうして自分は龍女成仏を当事者として受け取り、継続して研究対象とすることができなかったのか――今更ながら考えを巡らしていたとき、ふと、舎利弗尊者が龍女の成仏に難信を示す場面を思い出した。

その時、舎利弗は、龍女に語りて言わく「汝は、久しからずして、無上道を得たりと謂えるも、この事は信じ難し。所以はいかん。女身は垢穢にして、これ法器に非ず。云何ぞ能く、無上菩提を得ん。仏道は懸曠にして、無量劫を経て、勤苦して行を積み、具さに諸度を修して、然して後、乃ち成ずるなり。又、女人の身には、猶、五つの障りあり。一には梵天王と作ることを得ず、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり。云何ぞ、女身、速かに成仏することを得ん」と。（注一）

女性の身では成仏できない理由がいくつも挙げられている。修士論文を書いていたときの私は、先行研究を参考にして、舎利弗尊者のこの発言は当時の社会的価値観の反映と捉えていた。しかし今の私にはまったく別の声として聞こえる。これは、他でもない私が、私自身に言い続けてきたことではなかったか。物心ついたころにはお前が跡取りだと言われるも、それは男の子が生まれなかったから自分が跡を継ぐしかないのだと子供心に理解した私は、いつしか自分が女性であることを不都合に思い、無意識のうちに男性のようになろうとしていたのではないだろうか。ところが愛する人との結婚が決まり、しかも夫も僧侶になるというので、私が女性であっても都合の悪いことはなにもなくなってしまった。それどころか、今や妻として、存分に女性らしく生きていって差し支えない。いや、最初から私は女性として思い切り人生を楽しんでよかったのに、自分で自分に圧力をかけていたのだ。それもこれも、周囲から「立派な跡取りさん」として認められたいからだったのだろう。そんなに自分を抑圧しなくても、また違った形で人々は私を受け入れてくれただろうと今では思うが、かつての私にはわからないことだった。経典の教えの筋からはずれた解釈かもしれないが、ともかく私はこの気付きによって、荒波から這い上がることはなくとも、自分が今苦海に溺れているということと、一筋の光が水面から差し込んできたということだけは、知ることができたのである。初めて経文が身体の中に入ってきたと感じた。ほんの少しだけ、私も「当事者」になれたと思った。

おわりに

立正大学に編入して仏教を学び始め、選んだ卒論のテキストは、日蓮聖人が書かれた女性宛のお手紙だった――いま思えばこの選択は、将来教化する人のためのものではなく、自分自身が日蓮聖人に救いを求めてのものだったのだろう。しかし私が抱えていた「女性であることの苦しさ」は、実は自分で自分の性を否定的に捉えていたが故のものであった。だからこそ、御遺文や経文の中でどれだけ女人成仏が説かれていても、それによって救われたという実感

が得られず、興味はあるのにどこか他人事のような感覚で読んでいた。自分で自分を否定しているうちは、どんなにありがたい教えも耳に入らなかった。このような状態で檀信徒に女性の成仏を語ったとしても、手応えを感じられないのは当たり前である。たとえ何か反応を示す人がいても、私自身がそれを感じ取ることができないだろう。

今回、初めて法華経の教えを自分に関係あるものとして捉えられたことを、「傍観者から当事者になれた」と表現したが、言い方を変えれば、それは「自分自身との関係を修復し始めた」ということだと思う。今はこうした経験を積んでいくことが、人間として成熟していく為のひとつの道であり、こういった自分の在り方が、いつか誰かの為にもなるはずだと信じている。

注一　坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（中）』（岩波書店、一九六四年）二二二頁。